ぼっかいどう

樺太における日ソ戦争の終結――知取協定

ニコライ・ヴィシネフスキー著

停戦協定 ロシアの視座から追求

副題の地名をシリトルと読める人は、日本でもよほどのサハリン通である。サハリン生まれのロシア人作家が日本領南樺太で展開された「日ソ戦争（1945年8月9日～23日）」を描いたノンフィクション作品（原題は「シリトル協定」）。著者はソ連・ロシア情報のみならず、関連する日本語文献も駆使して、その全体像をロシアの視座から追求する。類書を欠くわれらにとっては頗る読みごたえのある著述である。

日ソ両軍代表の鈴木康生大佐とミハイル・V・アリーモフ少将は8月22日、全島停戦協定を知取（現マカーロフ）で締結した。ところが著者によると、ロシア側には同協定に言及した記録が皆無で、自身も白木沢旭児北大教授の2008年報告（訳書巻末の「白木沢解説」参照）に啓発されたのだそうだ。したがって、「シリトル協定」はヴィシネフスキー提唱の新語である。この新語は果たして、ロシアの学界や言論界で定着するのだろうか。

原書はモスクワの「ペロ」社が17年に上梓した136ページの上質紙冊子、マカーロフ市役所の刊行物（300部発行）である。「序言」には本書がマカーロフ市長の「イニシアチブから始まった」とあり、また訳出されていない原書内表紙の「梗概」では、同市の観光行政に資するとも謳われている。日露両国の相互理解はこのようにして深められるのであろう（「訳者あとがき」参照）。

スターリンは45年、サハリン南部・北海道東部・千島列島を領土とする「アイヌ共和国」を構想したが、「同盟国のアメリカ人によって阻止された」（S・ゴルブノフ「アイヌたち」POLE誌100号、北海道ポーランド文化協会、札幌）。留萌―釧路ラインを境界とするいわゆる北海道分割案のことであろうが、トルーマンはこれを退けたとされる。ひょっとすると赤軍は北海道進攻を念頭に、知取での停戦協定を急いだのではあるまいか。小山内道子訳。

（井上紘一・北大名誉教授）

御茶の水書房　3080円